

言語の働きへの理解を深めることを目指した指導の在り方

— 「推論発問の要素を取り入れた発問」を用いた現在進行形の指導を通して—

松村健 ・ 赤松猛 ・ 小野章*

要約：本研究の目的は、「推論発問の要素を取り入れた発問」を用いた指導が、言語の持つニュアンスに対する理解が生徒に深まるかどうかを検証することである。「推論発問の要素を取り入れた発問」により、生徒は対話場面を捉えようとするようになった。明示的発問のみの指導では、言語の持つニュアンスに対する理解の深まりが見受けられなかったが、明示的発問と「推論発問の要素を取り入れた発問」の両方を用いた指導では、その場面で使用されている言語や文法の働きに着目できるようになり、理解が深まることを明らかにした。リーディング指導は、アウトプットに至るまでのインテイクの段階で多くの選択肢を生徒に提供するものと考えられる。

キーワード：推論発問、言語の持つニュアンス、明示的発問、インテイク

I. 問題の所在

中学校英語科において、「書くこと」はアウトプットの手段として捉えられており、その質を高めるために、様々な指導・実践が行われている。大井（2008）は、コミュニケーションを意識し書き手のアイデアが読み手に的確に伝わるように論理的一貫性のある配列、構造化するパラグラフ・ライティングの重要性を述べている。松村ほか（2009, 2010）は、問答の形を英語の主張形態にあわせた「問答ゲーム」を用い、いわゆる双括型の主張形態の定着を図った。その結果、結論-理由-主張-結論の型は定着することができた。しかし、英文自体には、「問答ゲーム」による効果が見受けられなかった。具体的には、1つ1つの英文において各語が持つ中心的な意味やニュアンスを生徒が捉えられず、主張したい英文と実際書いた英文にはギャップがあるという課題を指摘している。

広島大学附属東雲中学校（以下、本校）生徒のライティングの傾向は、①日本語をそのまま英語にしようとして、未習語を誤用する、②「can=できる」のような英語と日本語の意味を1対1対応で捉えており、状況に応じて適切な英語を取捨選択する生徒が少ない、などである。第2言語習得の過程において、インプットはアウトプットに先立つ。本校生徒は、アウトプット以前のインプット段階において、言語が持つ意味やニュアンスを的確に捉える力が不十分ではあるまいか。このような問題意識から、本研究を着手するに至った。

II. 研究の目的

本研究の目的は、授業における発問に着目し、場面や状況を問う発問を通して、言語が持つ意味やニュアンスに対する理解を深めることができるかどうかを検証することである。授業を構成する上で、発問は重要な役割を果たすと考える。発問には、生徒の思考活動へ刺激を与える機能があり、この機能が英文読解において思考を深め、内容を深く理解する一助となると考える。発問について、田中・田中（2009）は「生徒が主体的に教材に向き合えるよう、授業目標の達成に向けて計画的に行う教師の働きかけ」と位置づけており、さらに田中・島田・紺渡（2011）は、教材の深い理解を促すには推論発問が必要であると述べている。推論発問とは、明示的発問のような内容理解を求めるものではなく、対話の情景や言語の働きを捉えるような発問のことを指す。推論発問の要素を取り入れれば、英文の内容を深く読みとる可能性がある。そして内容を深く読み取る際には、言語の使用場面や働きに着目しなければならない。それは漠然と英文の場面や状況を想像するのではなく、英文内にある根拠をもとに内容を把握していくからである。つまり、推論発問の要素を取り入れれば、言語の使用場面や働きに気づかせ、言語が持つ意味やニュアンスの理解が深まるのではないだろうか。

* 広島大学大学院教育学研究科

Ⅲ. 研究の概要

1. 実践時期と実践対象

実践時期は2014年11月、実践対象は本校第1学年(1組40名、2組39名)である。両クラスの2学期末テストのリーディング問題(外国語理解の能力)の得点を比較すると $p=0.41$ でリーディングに関する理解度は同質であると言える。

2. 実践方法

両クラスとも、現在進行形の授業(全11時間)を受講した。1組には、明示的発問のみを用いた指導を、2組には明示的発問と「推論発問の要素を取り入れた発問」を用いた指導を実施した。そして、言語の持つニュアンスに対する理解を深めているのかを、ルーブリック(表1)を用いて検証した。ルーブリックによる得点のつけ方の例を次に示す。Mary flies to the Occident twice a year to buy fashionable clothes.を取り上げると、この文に対して「Maryはお金持ちでしょうか。」という発問をした場合、「飛行機に乗って年に2回も買い物に行くのだからお金持ちである」という解答が出たとする。これはfliesという本文の根拠を元に解答しているので3点となる。

また実践対象の本校第1学年2組(39名)にアンケートを実施し、「推論発問の要素を取り入れた発問」に関する生徒の情意面も調査した。

表1 リーディングの理解度を測るルーブリック

| 点 | 内容 |
|---|--------------------------------------|
| 3 | ・対話文中の根拠をもとに日本語で内容を答えることができる。 |
| 2 | ・対話文中の根拠をもとにしてはいないが日本語で内容を答えることができる。 |
| 1 | ・日本語で内容を答えられない、または誤答。 |

3. 取り上げる文法項目について

調査で焦点を当てた現在進行形はいわゆる静止画ではなくビデオムービー的な描写をする際に用いることが多いが、Declerck(1991)は、現在の「計画」や「取り決め」から予期される未来の出来事を表現することができるとしている。このように、現在進行形には様々な捉え方があり、本調査ではビデオムービー的な意味を指導した後に、予期される未来の出来事を表す意味を実験群、

対照群に分けて指導した。

4. 実践の概要

本校が使用する東京書籍のNew Horizon Unit9(pp.82-87)を用いて、計9時間指導した。各時間の目標(表2)は前半で教科書を使用して現在進行形の形(be動詞+動詞のing形)・意味(「～している最中である」)・用法(be動詞を用いて疑問文や否定文を作成する)を指導し、その理解度を描写活動でとらえた。後半では自作の対話文を用いて、いわゆるビデオムービー的なニュアンスとは異なる「今から～します」を捉える内容を導入した。

表2 各時間の目標(全9時間)

| 時間 | 各時間の目標 |
|------|---|
| 1 | ・現在進行形の意味①「～している最中である」・形(be動詞+動詞のing形)を知る。 |
| 2 | ・現在進行形を用いた描写しようとしている(話すことに関する関心・意欲・態度)。 |
| 3 | ・対話文を読んで、現在進行形の意味①・形を理解することができる。 |
| 4 | ・対話文を読んで、現在進行形の用法を知る。 ・対話文を読んで、現在進行形の意味①・形を理解することができる。 |
| 5, 6 | ・対話文を読んで、現在進行形の意味①・形・用法を理解することができる。 |
| 7 | ・現在進行形を用いた描写することができる(書くこと)。 |
| 8 | ・現在進行形の意味②「今から～します」を理解することができる。 |
| 9 | ・現在進行形について日本語で説明できる。 |

3, 4, 5, 6時間目に授業で用いた発問例とその正答率(表3)を見ると、意味「～している最中である」・形・用法についてはほぼ理解していると推察できる。

表3 授業で用いた発問例とその正答率

| 発問内容 | 正答率 | |
|---|------|------|
| | 1組 | 2組 |
| ・ Sakura is listening to music. を日本語にしてください。 | 98% | 100% |
| ・ (対話文中の Kevin is running to them. に対して) What is Kevin doing? の答えを対話文から答えなさい。 | 100% | 95% |
| ・ (対話文中の) What are they doing in the kitchen? の答えになる部分を日本語にしてください。 | 93% | 98% |

IV. 結果

1. 授業過程

8時間目に使用した自作の対話文は、次の通りである。ホストファミリーである母親のエミ (A)、息子のジロウと留学生のルーク (B) による対話である。はじめの場面では、エミとルークがスーパーマーケットへ買い物に向かっている。次に、自宅で夕食をむかえる場面に切り替わる。場面の切り替わりやAとBの人間関係についての発問も準備したが、本調査では対話文中の I'm coming の意味「今行きます」を捉えるための発問を紹介する。

自作の対話文

A: We are going to that supermarket. Oh, be careful. The car is coming.
 B: Thank you, Emi.
 A: Sometimes cars don't stop at intersections in Japan.
 B: Really? Cars stop at intersections in Australia. It's a manner for pedestrians.
 A: Luke, dinner is ready. Jiro and I are waiting for you.
 B: I'm coming. Oh, fried pork! I like fried pork very much. Thank you, Emi.
 A: Luke, please call me 'Mom.' You're a member of our family now.

発問内容

1組 「I'm coming を日本語にしてください。」
 「どうしてそう思いましたか。」
 2組 「下から2行目の I'm coming は何を意味していますか。」
 「Bは今移動していますか。」
 「AとBはどんな状況にいますか。」

1組 (対照群) では、次のような解答が見られた。() 内の数字はルーブリックの得点である。

- ・私は来ています。(2)
- ・私のところへ来て。(1)
- ・私はスーパーへ来ています。(1)
- ・私のところへ来てください。(1)

解答の多くはビデオムービー的な意味を基盤にして書かれており、そのせいで場面が映像化しづらくなっている様子だった。「どうしてそう思いましたか。」という発問には、「現在進行形だから『来ています』にした。」といった意見が大半を占めた。対話文中の The car is coming 「車が(こちらへ向かって)来ています。」と同じような意味だと予想していた生徒が大半で、場面を捉えられていない様子だった。そこで、ロールプレイを取り入れて対話させる場面を設定すると、「今から行きます。」という意味になっていることに気づいていった。

一方、2組 (実験群) での解答例を、以下に示す。

- ・私は来ています。(2)
- ・私は来ます。(2)
- ・今から来ます。(2)
- ・今から行きます。(3)
- ・私は向かっています。(2)

場面を捉える発問を取り入れたおかげで、AとBが自宅に戻っており、別々の部屋にいるのだろうと考えている生徒が多かった。そのため、上述のような正答や正答に近い解答が見受けられた。しかし、ビデオムービー的な意味を含む解答もあったので、繰り返し発問として「Bは今移動していますか。」を用いた。すると半数程度の生徒が「移動している」のではないかと考えていた。理由

を尋ねると、現在進行形はビデオムービー的な意味であり、be動詞と動詞のing形になっているから、「～している最中である」という意味になるからだという解答が多くを占めていた。そこで、「AとBはどんな状況にいますか。」という発問をすると、状況に関して話し合う生徒の中から、「移動する前じゃないか。」「『ごはんよ。』に対する『今行くよ。』じゃないか。」といった意見が出てきた。それらを取り上げると、「今から行きます。」という意味になっており、この場合はビデオムービー的な意味ではないことに納得している様子だった。

2. 実践問題の結果

実践問題をルーブリック(表1)により、分類した結果は、次の図1のようになる。

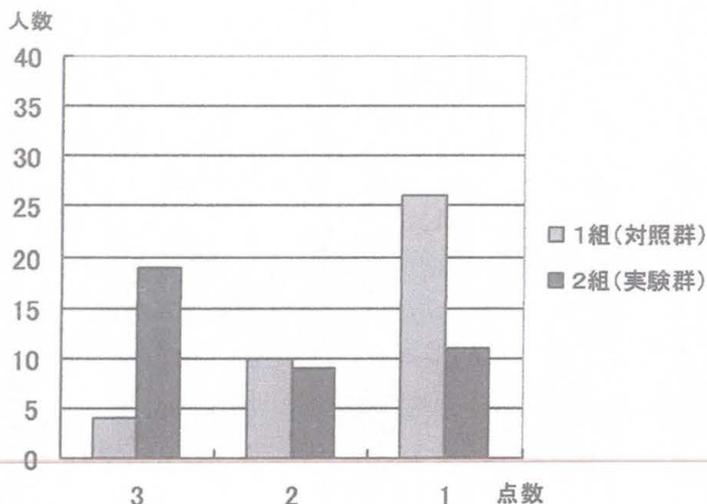


図1 ルーブリックの結果

また、実践後に2組(実験群)のみを対象に実施したアンケートでは、「推論発問を取り入れた発問」に取り組むことが好きな生徒は39名中28名で、理由の大半が「人間関係や場面を理解することができるから」であった。また、自由記述欄には次のような回答があった。

- ・場面や状況を問う質問は難しいけれど、状況がよくわかるので面白い。
- ・どんな状況なのだろうといつも考えることができるようになった。
- ・文法にはいろいろな意味があることが質問で分かるようになってきた。
- ・人間関係をいつも考えることができるようになった。
- ・場面を考えると、想像ではなく英文をもとに考え

ることができるのが面白い。

- ・単語や文法の意味が場面や状況によっては、いろいろな形になっていくのが難しい。
- ・言葉だから状況に応じた意味にしなければならないことが分かった。

V. 考察

ルーブリックの結果(図1)から、2組(実験群)で用いた「推論発問の要素を取り入れた発問」は、状況や場面を捉えるだけでなく、言語が持つニュアンスへの理解を促す効果があることがうかがえる。「対話文中の根拠をもとに日本語で内容を答えることができる」(ルーブリックの3点項目)の差は顕著で、明示的発問のように直接的な発問では、場面がイメージしづらく、既知を用いた意味の捉えに留まってしまうことが推測できる。両クラスともに、「対話文中の根拠をもとにしてはいないが日本語で内容を答えることができる」(ルーブリックの2点項目)がほぼ同数で10名程度の人数となっている。これは、学習塾等に通う生徒が事前に意味を知っていて答えたものや、なんとなくあてずっぽうで答えたものが含まれていると考えられる。これらの生徒については、自らの解答の理由を答えられない生徒が多かった。また、「日本語で内容を答えられない、または誤答」(ルーブリックの1点項目)に該当する生徒は、いわゆるビデオムービー的な意味から英文を捉えようとしており、場面や状況よりもI'm comingのみを見て答えている者が多いようだった。

また、上述したアンケート結果からも、「推論発問の要素を取り入れた発問」は、言語の意味やニュアンスへの理解を促すことができるようである。生徒にとっては、明示的発問の方が簡単に答えやすく、日本語の意味を捉えるには十分であるが、明示的な部分の理解のみでは、アウトプットする際に、「can=できる」のように1対1対応で英語を用いる恐れがある。それは、文章としては正しいかもしれないが、言語の持つニュアンスを度外視したものとなってしまい、コミュニケーションが不十分になる可能性がある。「推論発問の要素を取り入れた発問」を用いれば、アウトプット前のインテイクの段階で、場面や状況を考え、言語の意味やニュアンスを取捨選択することが可能になるのではないだろうか。もちろん明示的発問が悪いと言っているわけではない。明示的発問により、言語の持つニュアンスへの理解が促進されるこ

ともあるだろう。そういう視点に立つと、明示的発問のみであっても、「推論発問の要素を取り入れた発問」のみでも不十分なのかもしれない。実際、本調査では両方の発問を組み合わせて指導した。その結果、明示的発問のみの指導よりも組み合わせたほうが、効果があることが分かった。つまり、明示的発問と「推論発問の要素を取り入れた発問」を組み合わせることが質の高いインプットを生徒に提供できる可能性があるのではないだろうか。そして、中学校におけるリーディング指導では、こうした発問の組み合わせを意図的且つスパイラルに取り入れていくことで、インテイクの幅を広げることができるはずである。さらに、こうしたリーディング指導が質の高いアウトプット（スピーキング、ライティング）につながっていくはずである。4技能を統合した指導という視点でも面白いアプローチではないだろうか。

V. おわりに

本研究では、「推論発問の要素を取り入れた発問」を用いた指導により、言語の持つニュアンスへの理解を促すことに資することが分かった。しかし、言語の持つニュアンスへの理解のみでは、アウトプットへはスムーズにつながっていかないことが予想される。リーディングにおいては、「推論発問の要素を取り入れた発問」を用いた指導のほかに、多くのインプットをねらいとした多読の指導も必要であると考え。今後は、言語の持つニュアンスを理解した上で、多読を進めることによって、インテイクの質を高めることができるのかどうかを検証していきたい。

引用・参考文献

- Declerck, Renaat : A comprehensive descriptive grammar of English, 開拓社, 1991.
- 松村健, 山崎学肖, 柳瀬陽介 : 英語科における表現力を高めるライティング指導の在り方についてー「言語技術」を活用した指導の実践を通してー, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」第41集, 85-91, 2009.
- 松村健, 山崎学肖, 柳瀬陽介 : 英語科における表現力を高めるライティング指導の在り方についてー「言語技術 絵の分析」を活用した指導の実践を通してー, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」第42集, 83-90, 2010.
- 大井恭子 : パラグラフ・ライティング指導入門ー中高一効果的なライティング指導のためにー, 大修館書店, 2008.
- 白井恭弘 : 英語教師のための第二言語習得論入門, 大修館書店, 2012.
- 田中茂範, 佐藤芳明, 阿部一 : 英語感覚が身につく実践的指導ーコアとチャンクの活用法, 大修館書店, 2006.
- 田中武夫, 島田勝正, 紺渡弘幸 : 推論発問を取り入れた英語リーディング指導, 三省堂, 2011.
- 田中武夫, 田中知聡 : 英語教師のための発問テクニックー英語授業を活性化するリーディング指導, 大修館書店, 2009.

Enhancing Understanding of Language by Teaching Grammar Using Inferential Questions

Takeshi MATSUMURA, Takeshi AKAMATSU, and Akira ONO

Abstract. This study aimed to examine whether the use of inferential questions offers the possibility of enhancing students' understanding of nuances in the study of English as a foreign language. The object of the exercise was for students to grasp the situation contained in a dialogue through the use of inferential questions. We found that the students in one class, who used only fact-finding questions, were unable to understand meanings and nuances in English; however, students in another class were able to understand the meaning of the dialogue through both fact-finding and inferential questions. This kind of approach to reading comprehension offers various possibilities at the stage of intake for students.

Key words: Inferential questions, English nuances, Fact-finding questions, Intake